

文語日誌(平成二十六年九月九日)

新刊書を扱ふ書店にてはもはや見ゆること能はざる名著の一つに「折々のうた」あり。

もともと「折々のうた」は一九七九年一月以降二〇〇七年三月迄朝日新聞朝刊一面に連載せられし記事(字數制限百八十字以内)に若干の加筆をばしたるもの(字數制限二百十字以内)にて、執筆者は詩人の大岡信氏(一九三一年生、舊制一高・東大國文科卒業)なり。

順次一年分を單位として岩波新書に纏められたる處、好評につき、「折々のうた」シリーズは全十卷、「新折々のうた」シリーズは全九卷を數ふるに到りたり。

先日偶々神保町高山書店前ワゴンの一冊百圓コーナーに「折々のうた」シリーズの第七卷までの七冊を發見したれば直ちに購入したり。連載のいつまで續くや不透明なる状況下に執筆せられければ、初期の著作に秀歌・秀句の集まりたるは至極當然のことなり。萬葉集より現代詩に至るまで日本文學の粹、珠玉の如くに並び、日本文學史のいかに豊穰の世界なるか、改めて深く感じ入りたる次第なり。

大岡氏曰く、若き世代も含めて「日本詩歌の常識づくり」を狙ひたりと。

第一卷の冒頭は萬葉集にある志貴皇子の歌なり。

「石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも」

岩波書店よりは愛藏版として「折々のうた 三六五日」(二〇〇二年刊)も出版せられ、日本短詩型詞華集と銘打たる。一家に一冊常備するに相應しからずや。

大岡氏の類似の企畫として「四季歌ごよみ」(學研、一九九一年刊)なるものもあり。春夏秋冬及び戀の卷の全五卷より成る。たとへば、夏の卷を見るに、古今集にては夏の歌二十四首中實に二十八首に「時鳥」詠まれたるとぞ。先人の季節感、我々も引き繼ぎたしと覺ゆ。

(追記)その後、神保町古書肆の愛書館中川書房にて朝日文庫「新編折々のうた」(一)より(六)まで揃ひを千八百圓にて購入することを得たり。(一)には二年分の春と夏の歌を集むるなど、多少の換骨奪胎あるものの、ほぼ同一内容の書籍、岩波書店と朝日新聞の兩方より刊行せらるるは、出版界に稀なることと覺ゆ。それだけの價值ある名著とこそ言ふべけれ。